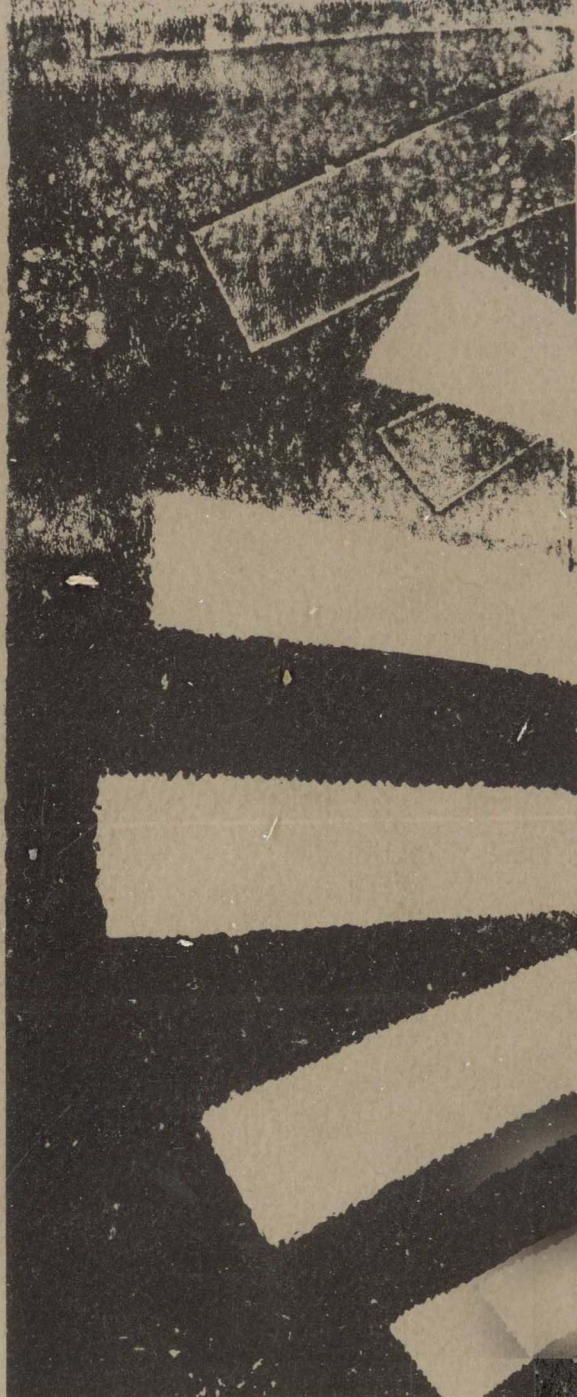


みんな死ね



みんな死ね

菊村 到

新潮社版

昭和三十六年三月二十一日 印刷
昭和三十六年三月二十五日 発行

定価 二六〇円

著 者 菊 村 到

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話 東京 〇四六二一
振替 東京 八〇八番
乱丁・落丁のものは
お取替えいたします

印刷・塚田印刷株式会社

製本・神田加藤製本所

© I. Kikumura Printed in Japan

目次

みんな死ね……………	五
殺さないで……………	五一
この男ではない……………	九一
男が命を賭ける時……………	一一七
殺してやりたい……………	一五一
これらの小さな世界……………	一七五
あとがき……………	二三〇

装
幀

鶴
岡

政
男

小菊
説村
集到

み
ん
な
死
ね

木部安男きべやすおはいつも孤独のうちにめざめる。あさ、眼をさましたとき、いつもひとりぼっちでいる自分を見いだす。二十八歳のかれにとって、それは全くさびしく、つらいことだ。けれどもかれはそれに耐えなければならぬ。どんな人間でも死ぬときは、ひとりで死んでいかなければならないように、木部安男はめざめるとき、ひとりでめざめなければならぬ。

だが、その日、かれは孤独のうちにめざめただろうか。かれはふっと眼をさます。そして自分がいつもの朝とは全くちがった朝のなかに置かれていることに気がつく。それはかれの心をせつなく波立たせる。いま、かれは自分がけっして孤独ではないことをはっきりとみとめる。ふたりでむかえる朝というものの肌ざわりをかみしめてみる。

かれは寝がえりを打つ。かれの顔とほとんどすれすれのところに荒木正子の顔がある。彼女はまだめざめてはいない。わずかにくちびるをひらき、かすかな寝息を立てている。全く平和な寝顔というべきだ。その寝顔の平静さがかれを戦慄させる。

よろこびのあとのがい気分がゆっくり木部安男のからだにしみひろがっていく。女中がぶえんりよな足音を立てて廊下をとおっていくのがきこえる。まるで一刻もはやく客をベッドからひきずりおろして、朝のまちへたたきだそうとでもしているみたいだ。

木部安男は、はらばいになってたばこをくわえる。けむりをはきだしながら、じっと荒木正子の寝顔をのぞきこむ。それから、この女の亭主のことを考える。あした、荒木和明は修学旅行か

み
ん
な
死
ね

ら帰ってくるだろう。荒木和明は、高校の数学教師をしている。

全く善意のかたまりみたいな男だ。そういう男を、木部安男と荒木正子はうらぎったのだ。

木部安男と荒木夫妻はおなじアパートのとなり同士に住んでいる。日常生活の持っている平和や安息をおたがいにたいせつにまもりあいながら、おだやかな微笑をかわしあってまいにちまいにちをすごしているとなり同士。

だが、それはほんのうわべだけのことにすぎない。荒木和明が修学旅行で関西にむかって旅立ったるすに、その妻の正子と木部安男とはこんなふうにより市内の旅館の一室で、おなじ夜をすごしている。

じつさい、なんと退屈で、なんとはらだたしいことか。木部安男はけむりを大きくはきだす。

正子はまだめざめない。木部安男はゆうべの正子をおもいだす。正子のおのき、正子の硬直、正子の弛緩、正子の波立ち。正子の――、木部安男はけむりをはきだす。

あした、この女の亭主は帰ってくるだろう。そしてまたおなじような日常生活がこの女とかれとのあいだにふたたびやってくる。おれはかれらにたいして十分愛想よくふるまうだろう。おれはかれら夫婦にとって全く善意と愛情にみちたこのましい隣人となる。

――正子がなにか言ったようである。けれどもことははっきりとはききとれない。木部安男は正子のほうに顔をねじむける。すると、そこに大きく眼を見ひらいた正子の顔がせまってくる。

「いま何時かしら」こんどははっきりとそういう正子の声が木部の耳にとどく。

木部は腕時計をのぞきこむ。木部は女と寝るときも、腕時計をはずさない。いやがる女もいる

が、そんなことは木部の知ったことではない。腕時計をはずさないことには、べつに理由はない。それは習慣の問題にすぎない。習慣——、女と寝ることだって、要するに習慣の問題にすぎない。生きるということはけっきょく、習慣の堆積^{たいせき}のなかで死んでいくことにほかならないだろう。

「八時三十五分」

木部安男はかわいた声で答える。

あと一時間後には木部は会社に着いていなくてはならない。ゆうべ、自分のからだのなかをばげしくかけめぐったものから完全に自由になって、化粧品会社の宣伝用のパンフレットのための仕事のなかに自分をのめりこませていなくてはならない。

「私たち——」と正子が言う。

木部はふかくけむりを吸いこみ、それからゆっくりはきだす。胃の内がわにしみこむものがある。そいつは存在の痛みとでもいうべきもののなのかもしれない。

「これからさき、どうなるのかしら」

「わからないな、ほんとうにわからない。だいいち、きょうこれからぼくが会社に行くだろう、そのぼくをおもいがけない事件が待っているかもしれない。その事件のためにぼくらはもう会えなくなってしまうかもしれない」

木部はできるだけ、いやみたらしくそんなことを言う。

「いや、いや、いや——」正子はほとんどうたうたように言う。「そんなことを、おっしゃっちゃ、いやだわ。私、いつまでもこうしていたい。もうあのアパートなんかへ帰りたくないわ」

彼女の腕が、木部の首にからみつく。木部は正子のひたいの髪のはえぎわにやわらかくくちび

るをおしあてる。木部の心がいたむ。おれたちの恋がおわるとき、おれたちはいったいどんなふうにしてわかれるだろう。

「愛してる？」正子が言う。「あなた、私を愛しててくださいるの？」

「ああ」木部は心がいたむ。「とってもね」

それはたぶんほんとうだろう。おれはほんとうにこの女を愛しているにちがいない。かつておれが和代を愛したようにな。

木部は和代をおもいだす。和代の肌のぬくもりやなめらかさやしめりけやふるえやそれからもつと微妙で豊饒な細部の起伏や曲折、反応のすべてをおもいおこす。木部の心がいたむ。

「とっても？」正子が言う。あまいすきとおるような声で正子が言う。

退屈が木部をとらえる。木部はもう答えようとはしない。

「これからさきも、会ってくださいる？　くださるわね」

「いつでも」と木部は答える。「会うさ」

こんなことをしていたら、きつともうおれはだめになるだろう、と二十八歳の木部は考える、だめになるというのはいいことだ。

おれは女を愛するばあいでも、いつもこんなふうにかげにまわってこそそやってきた。おれはまともに女を愛したことがない。正々堂々と真っ正面から女のふところにはいつていったことがない。

木部はいつも自分が人生の片すみにおしやられているような気がしてならない。いつでもめぐまれた日のかがやく場所に身を置いて、一步一步、確実に人生のもっとものぞましい頂点へとむ

かつてあるいて行くようなタイプの人間がいる。

木部はそういうタイプとまるで反対なのだ。かれの立っている場所はいつも日あたりがわるく、じめじめとしめつていてくらい。そういう場所にかれを置きざりにしたまま、かれの人生の時は、急速にすぎ去っていく。

だが、木部はそういう場所からむりに自分をひきはなそうとはおもわない。そういう場所は考えようによっては、けっして住みにくいところではない。

木部にはもと、そういう場所をこのむような陰湿なものがあるのかもしれない。

木部には、生きていくということは、かぎりなく存在が下降し、衰弱していくことにほかならないという気がする。木部には自分の存在が、一日一日おとろえ、頹^{たい}廃^{はい}していくのがわかるような気がする。

木部はべつにそれに抵抗しようとおもわない。たえず自分を衰弱の方向においてとらえていくこと——。ほろびの過程でささやかに人生をあじわい、たのしむこと——。

日ごとにやせはそっていく自分のからだを見つめ、なでまわすことに、木部は陰湿なたのしみをあじわう。

「私」と正子が言う。「幸福だわ」

「ぼくもだ」

木部はくちびるで正子の胸の起伏を愛撫してやる。正子が波立つ。一日はいまはじまったばかりなのだ。

会社でいつも、朝刊をひろげる。まいにち退屈な時間が経過していく。その退屈を確認するために新聞をひろげるようなものだ。それを確認したとき、いつも木部はほっとする。きょうもまたきのうと全くおなじように衰弱のなかで生きられる。

木部が正子とわかれて、会社についたとき、九時半になっていた。べつに早くもなければ、おそくもない時刻だ。宣伝部長の前田はまだあらわれていない。

前田は木部を呼ぶとき、いつも、

「ああ、木部君」と言う。

いつもきまった長さだけ、ああと言う。ああ、がおわったあとで、木部君ということばがやってくる。ああ、木部君。いつもそうなのだ。ああ、木部君……。

木部は湯のみのお茶をひとくち飲み、それから、退屈を確認するために新聞をひろげる。そしておもわず、あつ、と声をあげる。

それからかれはすばやくまわりを見まわす。いま自分があげた声をだれかに聞かれはしなかったか、とたしかめるように。

木部は、紙面のうえにひとつの事件を見る。退屈への期待を、この事件がみごとにうらぎってくれた。

木部はしばらく眼をとじて、呼吸をととのえる。

つまり、ひとが殺されたのだ。殺された人間を木部は知っている。木部の知っている人間が殺されたことを、それはつたえている。知っている人間、というよりも、愛したことのある人間と言ったほうがいい。

殺されたのは和代なのだ。けさ、木部は、和代のことをおもいだした。けれどもそのとき、すでに和代は死んでいたのだ。

和代は背なかを鋭利な刃ものでぐざりとひと突きされていた。それが和代のうえにおこったすべてなのだ。刃ものが彼女の存在をつらぬいたとき、彼女は生きることをやめなければならなかった。

和代の夫の高沢栄はあごとあたまと肩に負傷をした。つまりだれかが夫妻を傷つけたのだ。

「ひどいね、ひどいぜ、これは」

木部のうしろでだれかの声がある。新聞をひろげながら同僚が言うのだ。

「ぼくは」と、木部は言う。「このひとを知っているんだ」。

「へえ、知ってるのか」同僚はびっくりしたような顔をする。

「ぼくは三年前、このうちで家庭教師をやっていたことがあるんだ」

木部はあおざめた顔で言う。

なんとなく、木部の周囲に同僚たちがあつまってくる。

原因は痴情？——、そんなことばが記事のなかにはめこまれている。

「美人じゃないか」

「亭主が四十五で細君が二十五か」

新聞をみながら、くちぐちにそんなことを言う。木部はすこしずつ胸ぐるしさをおぼえはじめる。

高沢栄は外科の開業医である。もうかなりふるいし、病院も大きい。入院の設備もあって、六人の入院患者がはなれの病棟にはいつていた。

家族は妻の和代とひとり息子子の猛の三人である。ほかに家庭教師の楠本という大学生、看護婦の根本松江が住んでいる。

猛は十七歳の高校生だ。前の細君の末子が心臓マヒで死んでから二年ちかくなる。和代はもと、高沢医院で看護婦をしていた。

木部が和代を知ったころは、彼女は看護婦であった。細君の末子が死ぬと、まもなく和代が後妻にはいった。猛は末子の子である。木部が家庭教師をしていたころは、まだ末子は生きていた。そのころから末子は心臓がわるく、いつもあおい顔をしていた。

和代が末子の死後、高沢と結婚したことは、木部も知っていた。しかし、木部は家庭教師をやめてからは、和代にはほとんど会っていない。

木部が家庭教師をやめたのは、薬剤調合室で和代と抱擁しているところを、高沢に見つけられてしまったからであった。

木部はその場で、解雇を言いわたされた。木部は、高沢家を出されてから、一度だけ和代を抱いた。そのとき、かれは和代の心が完全に自分からはなれているのを知った。

木部はもう和代には近づこうとはしなかった。猛にはときどき会う。木部はよく猛のいる高校の前をとおる。そんなとき、ふっと猛に声をかけられたり、木部のほうで猛を見つたりすることがある。

猛は木部にはよくなつていた。木部はどちらかといえば、投げやりな家庭教師であつた。週に三回、高沢家にかよつて、英語を三時間ほどおしえればいいのだが、猛の語学力は、家庭教師の存在をほとんど必要としないほど、充実したものだつた。

木部も猛を氣に入っていた。猛にはどこか不健康な感じがあつた。かげを感じさせるようなものがどこかにあつた。そこが氣に入っていたのかもしれない。

当時、猛は十四歳だつたが、ときにおとなのような表情をみせることがあつた。やせて背ばかり高く、眼が少女のように大きく、いつもうるんでいる。まつげがながくて、いろが白い。

木部は猛と向きあつていて、ときどき一人前のおとなを相手にしているような氣がふつとして、とまどうことがあつた。

猛にじつと見つめられると、木部はなんとなく、胸がときどきしたり、顔があからんできたりする。

ときに猛の熱っぽくうるんだ大きな黒眼がちの眼に残酷なひかりがふつとさしこむことがあつた。その猛の眼のひかりは、そんなとき、木部をどきりとさせる。

木部は和代との情事を、猛に知られることをひどくおそれた。もしかしたら、猛はそれを見ぬいているかもしれない。けれども猛はそれを口にするようなことはなかった。だから木部には、猛が知っているのか、氣づいていないのかは全くわからなかつた。

和代は当時、木部のほかにも男がいたようである。そのころから和代と高沢ができていたのかどうかは、木部にはわからない。和代がのちに高沢と結婚したところを見ると、それ以前にふたりのあいだに決定的なむすびめができていたであろうことは容易に推察されるのだが、その時期